

江津市庁舎の設計過程にみる建築家吉阪隆正

日本近代 庁舎建築 U 研究室
江津市 広場 吉阪隆正

准会員
正会員
同
同
同

○ 諏佐遙也¹
本橋仁²
廣瀬翔太郎³
木村真拓⁴
中谷礼仁⁵

1. はじめに

1962年に竣工した《江津市庁舎》(竣工1962年・設計株式会社U研究室¹)は、その構造にプレストレスト・コンクリート工法(以下P.C)を利用した△型の柱と、それにより生まれるピロティをもつ市庁舎建築である。当時の橋梁技術を援用した点で、建設時より注目されていた²。

しかし長年、P.C 箇所の設計や施工主体が不明であった。昨今の調査で、施工主体の判明とともに、当時の図面等が発見された³。そこで本稿は、当初の設計意図から、この特徴的な構造を利用するに至った背景を、U研究室・江津市に残る資料の両者を整理することで分析を試みた。

ここではそれらの報告をおこなうとともに、U研究室における吉阪隆正の構想の応用が如何にされたかを考察する。

【江津市庁舎の概要】

所在地: 鳥根県江津市大字郷田 / 設計: 吉阪研究室 / 施工: 同上及江津市建築課 / 構造: 蛭田研究室(R.C.部分) 神山研究室(PS.部分) / 設備: 井上研究室 / 施工: 多田建設株式会社(一般部) 別子建設株式会社(PC部) 1962年(S37)3月15日竣工 / 建築面積 1,685,698 m² / 延面積 4,122,831 m²



図1. 江津市庁舎外観

建設の背景

江津市は、1954年に2町7村の合併により市制施行された。こうした市町村合併は、行政執行の適正化を背景に当時全国各地でおこなわれ、それらは「昭和の大合併」⁴として知られる。それにより、佐藤武夫や丹下健三をはじめ建築家の手によって多くの市庁舎建築が全国に建設された⁵。

既往研究

江津市庁舎については、P.C 構造に関する論文が二題発表されている⁶。そこには竣工してから10年後の論文であるが、当時においてもP.Cの建築への応用事例がまれであったことが述べられている。意匠的な側面を扱った論文はこれまでされていない。

江津市庁舎設計資料について

・U研究室所蔵資料 / 同事務所の図面およそ8000点が、2015年に国立近現代建築資料館に所蔵された⁷。これらの中に、江津市庁舎に関する図面は273点存在した。設計当初のエスキスから、申請図等が確認できるものの、P.C部分を含む構造図は含まれていない。

・江津市所蔵資料 / 設計時におけるU研究室と江津市とのやり取りの手紙が、2015年の調査で計65通発見された。手紙の内容は事務的な内容にとどまらず、吉阪隆正が市長に宛てた設計意図を伝える手紙も確認できた。また、資料のみならず、当時施工者として江津市庁舎の工事にあつた坂根正夫氏へのヒアリングを行い、設計や現場での話を伺った⁸。

2. 江津市庁舎の設計過程

江津市庁舎のエスキス図面や手紙のやり取り、ヒアリングをまとめ、設計過程を抽出した。

1959

U研究室への設計依頼 / 江津市の企業からの推薦による⁹。市長が吉阪の構想を汲み取り、計画が開始した。

基本計画の構想

ピロティを持つA棟と、台地に続くB棟の構成がとられた。広場のためのピロティを支える構造は未決定ながら、平面計画が進行された。

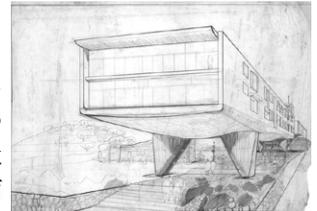


図2. 鈴木侑によるスケッチ

1960

初案の設計 / 構造の決定

R.C造、S造、S.R.C造の検討を経て、土木科の神山一への相談のちP.Cによって曲面天井のピロティを設計した。これはポストテンション材に鋼棒を用いる、別子建設の専売特許となるものであった。

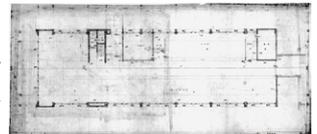


図3. 初案のA棟2階平面図

1961

市議会はピロティをつくる吉阪の基本的構想を承認しつつも、「柱を増やすなどして工事費を低廉に」、「増加しても節減出来ない場合は化粧的にでも付加を」との要望を告げた。



図4. 実施案のスケッチ

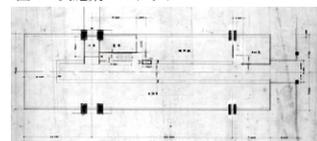


図5. 実施案のA棟2階平面図

実施案への変更

平面を変更することなくP.Cの利用を最小限にし、業者を指定しないピアノ線を用いた方式で工事費を抑える設計として、二又の△型の剛な柱となる。意匠は異なるものの、同面積の広場がつけられることとなった。



図6. 落成式のピロティ

3. 吉阪隆正の設計思想

江津市庁舎の設計にあたっては、敷地形状をそのまま活かした設計となっている。敷地は岩状の台地と、砂の層の平地で、脇に松林の公園をひかえており、平地から台地に向け海風の吹く土地であった。平地に橋状の長大なスパンをもつ執行各課の棟をもちあげ、これを台地に市民に対する窓口や市会の議場などの棟につなげる設計がされた。(図9)

もともと初案ではピロティで支えられる底面を、曲面のPCでとする設計が進められていた。これには意匠的な側面から検討があったようであるが、実際には経済的な事情により、A型の柱が支持する構成となった。当初期待していた意匠的な効果は失われてはいるものの、大スパンによるピロティの形成、市民の広場は構成として維持されている。

吉阪隆正は、西欧の事例をあげながら、市庁舎建築について次のような言葉を残している。

独立、自治、そしてその集団の団結を象徴するモニュメント、それはまた町全体のヘソを形成するものであり、自分らの自由を獲得してきた歴史的な記録(中略)
日本の市庁舎は…行政区域の単純化のための町村合併といったところから出発したものが多く…市民のもり上がる力がつくったというよりは、上からの工作でまともってきた(中略)
南米においてさえ、市庁舎前の広場は市民たちが、自分らの自由と独立を求めため集まる場所であった。¹⁰

吉阪は、市民広場の有意義さを述べながらも、全体の工事費に占める予算の1%しかないことに嘆いていた。PCを用いたA棟において広場にも建設費を計上すべきだとし、結果的には総工費の15%があげられることになった。

このように、江津市庁舎の設計にあたって、ピロティ部分における市民との接点を非常に重視している事がわかる。その設計は当初案から変わらず、様々な状況変化を受けても、プロセス全体を通して一貫していることがわかる。

4. 結論

U研究室は、庁舎建築に限らず、学校建築などの公共建築を多く残した。これまで、U研究室の作品は、その特徴的なディテールの形だけが注目され、評価が矮小化されることもあった。江津市庁舎もまた、手摺や巾木に特異なディテールを見出すことはできる。しかし、U研究室の共同代表をつとめた吉阪隆正自身は、江津市庁舎の設計プロセスに関する今回の分析においては、空間構成に関する議論に終始しているといえる。本稿では、江津市庁舎の一連の設計プロセスをみることで、U研究室という組織における、吉阪隆正の個人がいかなる役割を分担しているかの一端を指摘し得た。

1. 吉阪隆正、大竹十一、滝沢健児、岡村昇、渡邊洋治、山口堅三、城内哲彦、松崎義徳らによって設立された設計事務所。1954年設立。2. 社団法人プレストレストコンクリート技術協会の会誌に、工事ニュースとして取り上げられている。"わが国では場所打コンクリートによるPC建築の例は数少ないが、..."(『プレストレストコンクリート vol.3 NO.6』(社団法人プレストレストコンクリート技術協会、1961))
3. 島根県江津市役所において保管されていた、江津市庁舎設計時における青焼・手紙等一連の資料。平成25~26年度にかけて行われた、市庁舎の耐久、耐震性能調査に伴い整理された。
4. 1953年から1961年にかけて進められた市町村の合併のこと。1953年に施行された町村合併促進法や、同年に閣議決定された町村合併促進基本計画、さらに1956年に施行された新市町村建設促進法により全国的に市町村の合併が促進された。これらによりおよそ1万あった市町村数はおよそ3,400にまで減り、約1/3となった。
5. 町村合併促進法が施行された1953年から1963年の10年間に全国で建設された庁舎建築の数は、およそ140にのぼる。
6. 吉川潤、近藤正夫「江津市庁舎のP.S造構強度の審査について」日本建築学会研究報告(57)、318-323、1961.、中島儀八「江津市庁舎A棟の構造について」日本建築学会研究報告(57)、314-317、1961
7. 文化庁の委託事業として、早稲田大学が実施した平成26年度《近現代建築資料(建築家「吉阪隆正」)の調査概要》の成果による。
8. 2015年8月、江津市坂根正夫氏宅にて
9. 山陽パルプ江津工場からの推薦を受けたことによる。
10. 吉阪隆正『新建築 37 6』(新建築社、1962)より。

図1 筆者撮影 図2,3,4,5 国立近現代建築資料館蔵
図6『現代日本建築家全集15』(三一書房,1971) 図7,8,9 江津市役所蔵

【設計初期に吉阪が江津市長に宛てた手紙】

設計初期に、吉阪が当時の市長である千代延定良氏に宛てた手紙(下図7,8)。基本的な平面の計画が完了している段階にあり、平地の上部に執行部の棟をピロティとして持ち上げ、市民がその空間を通して庁舎内へとアクセスする構造を示している(右頁文は手紙からの抜粋)。

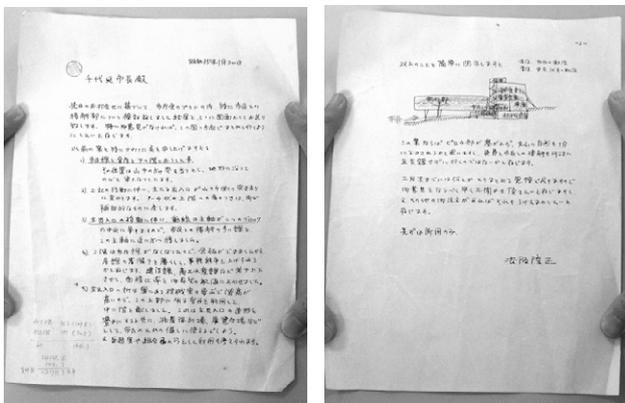


図7,8 市長への手紙

千代延市長殿 昭和35年1月30日

先日のお打合せに基づいて、市庁舎のプランの内、特に市民との接触部について検討致しました結果を、こゝに図面としてお送り致します。特に御意見がなければ、この図の方向でまとめて行くようにしたいと存じます。(中略)

赤線：市民の動線
青線：吏員、議員の動線

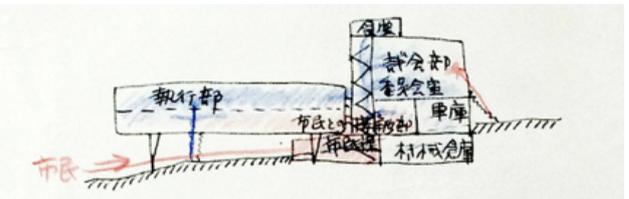


図9 手紙の文中の断面スケッチ

この案ならばピロチ部が塞がれず、丸山の自然も分に生かされるかと思えますし、吏員と市民との接触も円活に且交錯せずに行くのではないかと存じます。二月末までには何とかとりまとめる覚悟で居りますので御意見をなるべく早くお聞かせ頂きたいと存じますし、又その他の御注文があればそれをうけたまわりたいと存じます。先ずは所用のみ。

吉阪隆正

1 早稲田大学創造理工学部建築学科
2 早稲田大学理工学術院 助手
3 株式会社カッシーナ・イクスシー、修士(工学)
4 早稲田大学理工学術院建築学専攻修士課程
4 早稲田大学創造理工学部建築学科 教授・博士(工学)

1 Undergraduate, Faculty of Science and Engineering, Waseda Univ.
2 Research Assoc, Faculty of Sciences and Engineering, Waseda Univ.
3 CASSINA IXC.Ltd., M. Eng.
4 Graduate Student, Faculty of Sciences and Engineering, Waseda Univ.
5 Prof, Faculty of Science and Engineering, Waseda Univ., Dr Eng.